



HPS Japan
Hospital Play Specialist

ニュースレター

News Letter

<http://hps-japan.net/>

第10回国際シンポジウム開催 過去最高・163名が参加

2018
Vol.9
Mar.

2018年2月10日、記念すべき10年目となるHPS国際シンポジウムが開かれ、過去最高となる163名が参加。基調講演、子ども支援に関わる3団体からの報告・提案、HPSによるブースなど盛り沢山の内容で学びました。

シンポジウムテーマ

**健やかに成長し続ける子どもたちを支える
ホスピタル・プレイ**
～病院と地域の垣根を低くするための連携～



基調講演・講師

エリザベス・リディア先生

『子どもの尊厳を守る』をテーマ
にお話頂きました。

★スペシャルインタビューは2ページ
に掲載！



翌11日の第6回スキルアップ講座にも147名が参加

基調講演のあとは、様々な視点から子どもの支援に取り組む3団体から活動紹介・提案を頂きました。



NPO法人 親子はねやすめ(東京)
代表 宮地浩太氏

重度疾病・重度障がい児家族の
レスパイトケアの取り組みについて



NPO法人 ポケットサポート(岡山)
ICTプロデューサー 奥田修平氏

病気の子どもの学習・復学
支援の取り組みについて



親&子どものサポートを考える会(三重)
代表 土田幸子氏

精神障害の親を持つ子ども・
親子支援の取り組みについて



宮地さんにとって、遊びとは？
『遊びはビタミンです！』

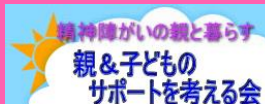
私たちは、重い病気や障がいのある子どもとご家族がくつろげる時間・空間づくりのお手伝いをしています。具体的には、旅行やキャンプにでかけます。小児科医が参加することもあり、病院から離れて対象のお子さんご家族とコミュニケーションできる機会ともなっています。病院と地域の垣根を超えるために、私が心がけていることは、自分の中に垣根をつくらないこと。立場や役職をこえて、人と人として向き合うことが大事だと思っています。もしご興味持たれた方は一緒に活動してみませんか？

特定非営利活動法人

**ポケット
サポート**

奥田さんにとって、遊びとは？
『遊びが仕事、仕事遊び』

病気やケガにより長期間、学校へ行けない子どもは全国に約5万人いると言われています。当団体では、入院中の学習支援、自宅療養中の訪問やテレビ電話による支援、さらに復学後も交流イベントを企画して、切れ目のない継続的な支援をしています。スタッフには慢性疾病を抱えながら進学や就職を経験した者もあり、ピアサポート相談で心理的ケアも大切にしています。『医療は命を救う、教育は心を救う』をモットーに、子ども1人ひとりの思いに寄り添い、ご家族や関係者も含めて、みんなが笑顔になれる社会を目指しています。



児童精神科の立場から見た、遊びとは？
『自然に感情表出ができ、
社会性や認知発達を促す上でも
子どもにとって欠かせないもの』

精神障害の親とその子どもを支援しています。これまでの経験から、親支援と子ども支援、両方やってうまくいっていると感じています。親が自身の病気を開示している場合、多くの子どもは自立出来ていますが、家庭内で語られない状況で育った場合、無力感にさいなまれ、大人に対する不信任感や、「親の顔色を見て行動する」=本当に自分のしたいことが分からない(アイデンティティの喪失)につながります。そのため、語りの場をつくり、対話を重視しています。HPSの皆さんには、もしそういう子がいたら、まず話を聞いてあげてほしい。そしてどの感情も、自分の大事な感情だと伝えてください。

★エリザベス先生 スペシャルインタビュー★

基調講演・講師のエリザベス・リディア先生にお話を伺いました！

Q. 「子どもの尊厳を守る」が今回のテーマでした。最初からこの理念で仕事を続けてこられたのですか？

A. すべての人が幸せになる権利を持っている。

子どもの尊厳を高め、それを維持することは、わたしの日々の仕事を貫く、最も重要な信念です。どうすれば、子どもたちが自分自身を尊敬し、また他者からの尊敬を獲得できるのか。わたしは、このことを支援計画や実践を通して具体化していますし、わたしのやっていることを見て、周りの人も同じように接することができるようにと願っています。

重複障害をもつ子どもたちをケアするとき、注意深く観察し、応対し、常に敬意を払えるかどうかは、すべて介助者に委ねられています。ごく最近のことですが、わたしの仕事に同行していた新人の男性スタッフから、こんなことを尋ねられました。「なぜあなたは、こんな重複障害の子どもに、それほど力を注ぐのですか？そんなことをして、どんな効果があるというのです？」彼は純粋な気持ちで尋ねました。

わたしはこう答えました。「彼らの能力は、大きく改善しないかもしれない。でも、子どもたちが人生を楽しみ、心が満たされ、そして介助者を信頼できること—それは彼らの能力が改善するのと同じくらい重要です。私と同じく、すべての人が幸せになる権利をもっているのですから。」

Q. 30年のキャリアで、挫折しそうになったこと、仕事をやめたいと思ったことはありますか？日本で奮闘するHPSへの激励・メッセージをお願いします。

A. それはありません。

辞めたいと思ったことは一度もありません。ただ、組織の整合性に疑問を持ち、何度か仕事を変えざるを得ませんでした。わたしは経営にはタッチしませんし、そうしたいとも思いません。なぜなら、わたしの仕事は子ども相手であり、机上の事務仕事ではないからです。しかし私は、多くの経営者は聞く耳を持っていると確信しています。あなたが、不平不満ではなく、よい解決策やアイデアを提示すれば、嫌な顔をせず、きっと聞いてくれるでしょう。

Q. 様々な専門職とお仕事をされていると伺いました。専門家ではなく“親”にしかできない固有の役割はありますか？

A. 親は子どもにとって幸せの根源

親の存在は、私が関わっている子ども一人ひとりが幸せになるために、もっとも重要な存在です。基調講演の際、わたしは、協働する専門職リストの中に、意図的に“親”を入れました。わたしは必ず、いつも親御さんと一緒に仕事をすることにしています。そうすることで、親御さんが何を大事にしているのか見つけることができますし、大切なことが何であるのか親御さんにアドバイスができると考えています。



Q. マカトンサイン(makaton sign)とサインアロング(signalong)は、違うものですか？

A. そうですね、多少違いがあります。英国でも、マカトンサインを使う施設とサインアロングを使う施設があり、各施設がどんな理由で選択しているかまでは、私には分かりません。

Q. 多動の子どもへのアプローチ方法を教えてください。

A. まずは子どもの感覚的ニーズを満たして

実のところ、多動のお子さんは私の専門ではないのですが、(私の専門分野である)感覚障害における数多くの文献と私自身の研究によれば、ADHDとASDの子どもは多くは感覚障害を抱えています。そこで私はいつも、大脳にアプローチする前に、まず子供の感覚的ニーズが確実に満たされるようにします。つまり、もし子どもがしっかりした触感、粗大運動、あるいはリズム遊びを好む場合、私はこれらを、座位で行う活動(食事も含む)の前に行います。たくさんマッサージして、それから子どもが集中できるように、chewellery(安全に口に入れることができ、首にぶら下げる歯固めのようなおもちゃ)で噛むことを促します。そして常に、自分のやっている事が、正しいアプローチに基づくプログラムなのか、OTに意見を聞くようにしています。

Q. 聴覚過敏あるいは感覚過敏の子どもへのアプローチ方法を教えてください。

A. ごく弱い刺激からはじめて

親切に！の一言に尽きます。聴覚過敏の子どもは、わたしたちが聞こえない音を聞いています。それはつまり、不快で不安である可能性がありますし、おそらく他のほとんどの感覚もそうです。ですから、視覚的に混乱するものや、過度な体のひねり、回転など(やりすぎた)不適切なタッチに圧倒される可能性があります。わたしたちが気づかないほどの、かすかな香りに対しても同じです。子どもたちを信じましょう。一つずつの要素に分けて、刺激の少ない低いレベルのものから紹介してください。時に、あきらめることも必要です。楽しいからといって何度も同じことを強要するのは禁物。人それぞれ感覚は違うのですから。

(訳：木村尚子、濱川優子)

今回は、名古屋ブロック特集です。前号で掲載しきれなかった、9月3日「ホスピタル・プレイ遊育ワークショップin 鹿児島」での名古屋ブロックの活動と、11月25～25日に愛知県清須市で開催された「トヨタハートフルフェア」への出展についてご紹介します。

名古屋 ブロック

ホスピタル・プレイ遊育ワークショップ in鹿児島



Supported by  THE NIPPON FOUNDATION  ToOTH FAIRY

9月3日 鹿児島にて

『パステルアート』

名古屋ブロックでは、ぼかし網で粉にしたパステルを塗料にして、紙皿の土台に子どもが選んだ型で、好きな色で思い思いに描くパステルアートを行いました。子どものニーズに合わせて、画板やトレーを使用したり、網の使い方の工夫やパステルを粉にする際に使用するお皿の枚数を増やせるように考えて準備を進めました。描く方法をコットン、割りばし付きガーゼ、手など子どもにあった方法を提案することで、すべての子どもが少しの援助で主体的に自分の世界を表現することを楽しめていました。たくさんの方の笑顔に触れ、親子やきょうだい、子どもと私たちもつながり、遊びの力を感しました。

●レポート (宮谷 友樹・森 浩恵)

☆名古屋ブロック長より☆

HPS名古屋ブロックの皆様
いつもブロックの活動にご協力頂きありがとうございます。来年度もブロック長 松井、副ブロック長 布施で担当していきます。引き続きご協力よろしくお願いします。

今回は4/14(土)18時～あいち小児(わくわくーむ)で開催予定です。今年度も養成講座が行われ新しい修了生メンバーも増えそうです。また、5/6(日)6/23(土)のイベントでの出展依頼もきています。こちらへの参加者も募集中ですので、ご協力お願いします。

●松井 幸子

トヨタ♥ハートフルフェア♥ in清須



11月25日
清須市ハートフル
プラザにて

『羊毛フェルトキーホルダーづくり』

名古屋市の隣、清須市で開催されたトヨタ・ハートフルフェアに名古屋ブロックの5名でブースを出展しました。フェアには2日間で400名以上の来場があり大盛況でした。HPSのブースは11/25(土)に出展し病気や障がいの有無や年齢、性別に関わらずいろいろな方に遊びを体験して頂きました。

羊毛フェルトは作るのが難しい…羊毛フェルトがケバケバするから呼吸器をつけた子どもは遊べない…と聞きますが、道具や作り方に少しの工夫を加えるだけで、誰でも遊ぶことができます。また、フェルトの色選びから用途まで(アクセサリーとして髪ゴムにしたり、キーホルダーにしたり)作る途中に選択肢があって、自分で決めることもHPSの遊びの中では取り入れていきます。たくさん作って、家族や友達にプレゼントする！と話す子どももいて、遊びで子どもと家族、友達をつなぐことができたかなと思っています。

昨年5月に小牧で開催された『休みの国 in 小牧あそび・まなぶワークショップ』をきっかけにAJU自立の家の方からお声かけいただき、初めてブースを出展させて頂きました。

次回6/23(土)開催のトヨタ・ハートフルフェアにも参加します！お近くの方はぜひご参加ください！

●レポート (南 伸代)



☆お知らせ☆ 静岡県短大のスタッフ 中野さんと濱川さんが3月をもって退職されることになりました。中野さんは助成金申請書の作成、濱川さんは通訳・翻訳で活躍されました。これまでありがとうございました。新天地での活躍を心からお祈り致します。後任の方が決まり次第、紙面にてお知らせいたします。

NPO法人日本ホスピタル・プレイ協会
～すべての子どもの遊びと支援を考える会～
〒453-0041 名古屋市中村区本陣通5-6-1
地域資源長屋なかむら1階
TEL&FAX 054(202)2652
Mail info@hps-japan.net
事務局 南 伸予、木村 尚子

HPS Japan 静岡県立大学短期大学部
〒422-8021 静岡市駿河区小鹿2-2-1
TEL&FAX 054(202)2652
Mail hps-japan@u-shizuoka-ken.ac.jp
事務局 中野美玲、濱川優子



HPS Japan
Hospital Play Specialist